「北海道・犬旅サバイバル」（服部文祥著）

植村直己 43 歳。長谷川恒夫 43 歳。星野道夫 43 歳。山田昇 39 歳。河野兵一 43 歳。小西政継 57 歳。著名な登山家たちが亡くなった年齢だ。

50 歳を越えたサバイバル登山家は、自分の登山家としてのピークを過ぎたことを自覚し、今後どのような登山をしていくのか悩む。体力が落ち、膝の痛みを抱えた体を酷使する登山はどこまで可能なのか？

悩んだ著者は現金もクレジットカードも持たす、愛犬ナツを連れて、宗谷岬から襟裳岬まで北海道南北分水嶺 700ｋｍを 10 月 1 日から 2 ヶ月間かけて歩き通すことを決意する。この本はその決意の記録だ。

「気がつけば、自分の経験と肉体をフル動員するような集大成といえる山旅をする時期を逸していた。そして膝の痛みがその事を決定づけた。50 歳を越える前はまだ大丈夫、とどこかで自分を騙し、困難から目を背けていたのかもしれない。

もう肉体を酷使するような山旅は止める潮時であることは解っていた。それでも最後にできることをしたいと、まっさらな自分の気持ちを素直に向き合った引退セレモニーのようなものだった。」と筆者は語る。

愛犬のナツを猟に慣らしておくために、三シーズンで何度か丹沢の裾野に出かける。関東近郊の猟に数十回、北海道の狩猟登山には五回も連れて行く。立派な狩猟犬に育っていく様子も描かれている。

背負っている食糧は米と調味料だけ。なんせ肉が手に入らなくなるとどうしても鹿を撃たなくてはならない。食糧確保の必要性が常につきまとうのだ。河原で野宿し、おかずは鹿を撃ったり魚を釣ったりキノコを採ったりして食い繋ぐサバイバル山行だ。

途中の山小屋 4 ヵ所に食糧をデポする。デポした食糧は基本米だが、密かに入れていたナビスコプレミアムクラッカーと干しプルーンを食べる喜びが伝わってくる。

宗谷岬から襟裳岬まで無銭で来たが、51 日目に知り合った男性に餞別金を 5000 円ほど頂いた。この使い道で悩む所が面白い。道の駅で生クリーム・全粒粉・おはぎ・シュークリーム・エースコックのイカ焼きソバを買う。帯広空港で残りの 3000 円を使う。手造りチーズ・六花亭のサクサクパイだ。長期山行から下りたとき、文明社会への順応として口にするジャンクフードの定番は小池屋のポテトチップスのノリ塩だそうである。すばらしい人生の暇つぶしの記録だ。

（深澤　裕）

2023 年９月 11 日　「北海道・犬旅サバイバル」服部文祥　みすず書房　1800 円